言語文化学科
表現文化コース

表現文化コースってどんなとこ？

表現文化コースは、私たちを取り巻く様々な現代社会の文化現象を、「人間が考えたり感じたりしたことの表現、人々のものの見方や感じ方が形や作品になったもの」と捉えて研究するコースです。このコースでは、小説、映画、美術、演劇、さらにはファッション、ポピュラー音楽やアイドル、マンガ、二次創作や同人活動なども、個人や社会の感性や価値観を「表現」するものとして研究していきます。映像を扱う授業ではメディア機器、視聴覚機器を積極的に活用したり、地域と結びついた色々なイベントの現場で実際の文化活動に携わる企画にも取り組んでいます。卒業生は放送局・マスコミ、芸術・広告関係、一般企業、国語や英語の教員、公務員など、多彩な職種で活躍しています。

三上先生の研究について

私は現在、演劇についての研究を行なっています。

演劇研究と一口に言っても、その方法は様々なものがあります。たとえば、地域や時代で異なる演劇の特色を研究してみる、戯曲を小説のように文学の一ジャンルとして捉えてみる、演技や演出など実際の上演に即して分析するなど、多角的な視点から研究することができます。

授業では現在、宝塚歌劇の講義を行なっています。宝塚は多くの女性ファンを有していますが、その人気には様々な理由が考えられます。

たとえば、宝塚が実際では実現しえない理想の恋愛像を具現化している点、また、現代ではジャニーズ、二次創作、2・5次元舞台などとも共通する多様で複雑な楽しみ方がある点など、宝塚は時代のニーズに適応しながら多くのファンを獲得してきたことがうかがえます。

演劇の観客が時代の中で求めているものは何か。それを追求していくのも、演劇研究の醍醐味です。

教授
三上（みかみ） 雅子（まさこ） 先生

おすすめの映画

『恋におちたシェイクスピア』（ジョン・マッデン）

1998 年のアメリカ映画。主人公はあの偉大な劇作家シェイクスピアですが、難しい伝記作品ではなく、大胆なフィクションを交えた、楽しくて切ないラブストーリー。当時の演劇が一体どういうものなのかもわかって、おすすめです。

細井さんの学びについて

3 回生
細井（ほそい） かおる さん

――コースに入ったきっかけ

小さい頃にピアノやバレエを習っており、また両親の影響もあってもともと芸術の分野に興味がありました。高校生のときにこの大学の表現文化コースを知り、ぜひここで学びたいと考えていました。

――コースに入ってからの気づき

私は最初、絵画の方に興味を持っていたのですが、授業を受けていく中で映像表現についてもおもしろいと感じるようになりました。また、コースに入る前は、ただ漠然と芸術の表現の技法を学んでいくものだと考えていました。しかし実際はそれだけでなく、様々な芸術作品の表現技法を学んだうえで、さらに幅広く作品を分析していきます。日常生活の中でも、普段何気なく見ていた映画などのエンターテイメントを以前とは違う視点から見ることができたり、新しい発見があったり、今までとは違った魅力に気づくことができます。

おすすめの授業

表現・表象文化論基礎演習

ほぼ毎回の講義で課題が出る大変な授業ですが、様々なジャンルの表現方法を実際の作品鑑賞を通して学ぶことで、作品分析の基礎を身につけることができます！「表現文化」という楽しげなコース名と授業内容の厳しさとの落差が、表文のシビアな一面を表象している授業だと思います 笑。

三上先生にとっての「芸術」

「芸術」というと、何か高級なもの、特別なものというイメージがあるかもしれません。しかし、英語やドイツ語の「芸術」という言葉（英語：art ドイツ語：Kunst）は、「自然」とは異なる「人が作り出したもの」というのがもともとの意味です。私にとって「芸術」とは、「心に潜む想い・欲求・考え方」が形になったもの全てです。自分の研究分野に引き付けて言えば、「演劇」それも「エンターテイメント」と呼ばれるようなジャンルにいま一番関心があります。女性が観客の大半を占めているミュージカルの客席で、私や他の女性たちは何を求めてここに来ているのだろうといつも考えています。笑ったり感動したりする中で、「自分にはこのような面もあるのか」「このような考え方もあるのか」と驚くことも少なくありません。「芸術」とは、いつも「新たな思いがけない自分」「新しい世界」に出会わせてくれる、出会いと発見の場なのかもしれません。

卒業論文 タイトル紹介

○ミュージカル『レ・ミゼラブル』における音楽の機能
○「2．5次元」としての『ラブライブ！』
○21 世紀のハリウッド映画における日本人の表象

今年の表紙・裏表紙写真は、大阪市立大学内「田中記念館」の庭園にて撮影させていただきました。

大学院
アジア都市文化学専攻

アジア都市文化学専攻ってどんなとこ？

アジア都市文化学と聞いて、何を研究しているのかピンと来る人はいないでしょう。アジア・都市・文化という各々の単語にはなじみがあっても、「アジア都市文化」が具体的に何を指すのか謎めいています。しかし、この学問の明確な定義が存在するのかというと実はそんなモノはありません。アジア・都市・文化というキーワードに少しでもかかわるものであれば、あらゆるものが研究の対象になります。特に、既存の文学部のコースではカバーしきれない分野や、複数の分野にまたがった総合的・横断的な研究ができることが強みです。教員の専門も学生の研究テーマも多種多様。様々な対象、視点、方法が錯綜する中で、お互いに刺激を受けながら切磋琢磨する、そんな専攻です（当専攻の教員は学部では学科間共通科目等を担当します）。

天野先生の研究について

私の主な研究分野は観光です。特に、現代観光を社会・文化論的視点から捉えた研究をしています。たとえばニューツーリズムという新しい観光形態について。今まで観光といえば、観光地に赴くことが目的でしたが、現代ではスタンプラリーなどのように、ゲーム感覚で観光地に行くまでの過程そのものを楽しむような旅も普及しています。また、アニメ作品等の舞台を訪ねるコンテンツツーリズム（聖地巡礼）も新しい観光の一つです。その他にも、都市におけるサブカルチャーや昭和レトロ、展望タワーなど、都市観光の魅力要素のあり方についても研究しています。

授業では、実際に観光ガイドブックを作って観光客に配布したり、ツアープランを組んでみたり、観光の現場へのフィールドワークを行なったりしています。

天野先生にとっての「芸術」

徳島県鳴門市にある大塚国際美術館が、今大変な人気を博しています。そこでは、千点を超える世界の名だたる芸術作品（たとえば、モナ・リザやゲルニカなど）を鑑賞することができます。なぜそんなスゴい作品を地方の一美術館が集めることが出来たのか。否、実際に集めたわけではなく、展示作品の全てが「複製」なのです。

複製と知ったうえで見に来る人が後を絶たないという現実。彼らにとっての芸術の鑑賞とは、必ずしも「本物」に触れるコトではないわけです。芸術が人々に及ぼすインパクトは、プロの「芸術家」が創作する高尚とされるものだけではなく、複製、模倣という営みや「素人」による創作に至るまで、人間のあらゆる表現活動の中に見出すことができるといえます。それは、ときに観光資源になったり、人々の絆を結ぶ契機となったり（アートワークショップ）、まちを元気にするツールとなったり（芸術祭）と、さまざまな可能性を秘めているのです。

准教授
天野（あまの） 景太（けいた） 先生

おすすめの本

近藤雄生『旅に出よう――世界にはいろんな生き方があふれている――』（岩波ジュニア新書）

5 年間リュック一つで世界各地を旅した著者の旅行記です。これを読めば異文化理解の本質が見えてくるかも。

授業紹介 その

表現・表象文化論演習Ⅱ

表現文化コースの授業で、アーツマネジメント（文化を社会に届けるプロジェクト）の企画立案から実施までを実際に取り組み学びます。

地理学実験演習Ⅰ・Ⅱ

地理学コースの授業で、昨年度は島根県奥出雲の調査を行ないました。写真は、鉄師・櫻井家（国・重要文化財）の日本庭園での集合写真です。

国語科教育法Ⅲ

教職の資格を取るための授業です。国語科の教員をめざす学生が教壇に立ち、模擬授業を行ないます。

博物館実習Ⅰ

学芸員の資格を取るための授業です。博物館の展示について、実際に資料にふれながら学びます。

人間文化基礎論Ⅰ

哲学歴史学科の授業です。学生が主体となって、自分が調べ、まとめてきたものを報告・発表します。

田中記念館にあるレストラン「めたせこいあ」で出されるレモンライスは、昔近所にあった「夏燈（かろ）」というお店の名物料理を引き継いだものです。